

複合的資源管理型漁業促進対策事業調査

5) イカナゴ(津軽海峡)

(抄 録)

伊藤欣吾

目 的

イカナゴの資源状態や生態を調査することによって、下北半島西部沿岸と津軽半島東部沿岸で策定されたイカナゴ資源管理計画に基づき、津軽海峡西部全体での広域的な資源管理をめざす。

調 査

2001 年 11 月～2002 年 3 月の期間、平館村と佐井村地先の漁業者に依頼して、定置網やタモ網でイカナゴ採集を行ったが、イカナゴは採集されなかった。1997 年以降に得られた冬期の生物測定データから、各年の産卵期間と産卵群の体長組成をとりまとめた。

津軽海峡西部～陸奥湾湾口海域において、2002 年 2～4 月に毎月 1 回、新型稚魚ネットの水平 10 分曳によりイカナゴ稚仔を採集した。特異年と思われる 1999 年、2001 年および 2002 年を除くと 1994～2002 年における稚仔分布密度と漁獲量との間に、相関係数 0.96 の極めて強い正の相関が認められた。しかし、この関係に当てはまらなかった 3 ヶ年の原因を解明する必要がある。

陸奥湾湾口海域の 7 漁業協同組合におけるイカナゴの漁獲統計資料を解析した。当海域における 2002 年のイカナゴ当歳魚の漁獲量（生換算重量）は 926 トンで前年比 36%、漁獲金額は 1 億 2102 万円で前年比 51%に減少した。2002 年の漁期は、1996 年以降最も早く始まり、最も早く終了した。単価は 1996 年以降、前年に次いで安かった。また、漁獲個体数を試算した。

陸奥湾湾口海域における水温データを解析した。当海域における海面水温は 1～2 月では平年並、3～6 月では 1℃程高めに推移した。底層水温は 8℃以上を保ち卵発生に適していた。

2002 年 8 月 27 日～31 日に津軽海峡において、試験船青鵬丸のオッタートロールによる海底曳を行った。大畑町沖水深 200m におけるイカナゴの分布密度は前年の 44%であった。

まとめ

イカナゴ漁況予測について、より正確な稚仔分布密度を調べるため、2002 年からはボンゴネットの傾斜曳調査を追加、また、ふ化から漁獲加入までの生残率と餌料環境の関係を明らかにするため、2002 年から動物プランクトンの分布調査を開始、さらに、親魚となる夏期の成魚分布調査を 2001 年から実施した。予測精度を高めるため、これらのデータを蓄積する必要がある。

イカナゴ資源管理について、2002 年 4 月 18 日に下北半島西部沿岸と津軽半島東部沿岸の合同のイカナゴ漁業検討会を初めて開催した。検討会では、イカナゴ資源は自然要因と漁獲要因によって変動するが、貴重な資源を持続的に維持管理することが、漁業経営の安定をもたらすものであり、資源変動を予測しながら漁獲量をコントロールすることが話し合われた。

発表誌：平成 14 年度複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書、平成 15 年、青森県